ロレンス

息子と恋人
死んだ男

伊藤 整・伊藤 礼 訳

河出書房

© 1968

カラー版　世界文学全集　第28巻

ロレンス　息子と恋人　死んだ男

昭和43年4月15日初版印刷
昭和43年4月20日初版発行

訳　者　伊藤　整
　　伊藤　礼

定価750円

装幀者　亀倉雄策

発行者　河出朋久

印刷者　澤村嘉一

印　刷　凸版印刷株式会社

発行所　株式会社　河出書房

東京都千代田区神田小川町3の6
電話　東京（292）3711（大代表）・振替口座　東京 10802

製　本・加藤製本株式会社
製　函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表　紙・日本クロス工業株式会社

目　次

ロレンス

息子と恋人……3

第1部

第一章　モレル夫妻の結婚生活の初期　5
第二章　ポールの誕生と新しい争い　26
第三章　モレルをあきらめウィリアムに執心する　41
第四章　若いポールの生活　51
第五章　ポールが人生に乗り出す　72
第六章　家族の中の死　96

第2部

第七章　少年と少女の愛　121
第八章　愛の戦い　153
第九章　ミリアムの敗北　183
第十章　クララ　215
第十一章　ミリアムの試練　237
第十二章　情熱　257
第十三章　バクスター・ドーズ　292
第十四章　解放　325
第十五章　捨てられたもの　351

死んだ男……363

年表……401

解説……407

巻頭口絵　ロレンス肖像

（ナショナル・ポートレート・ギャラリー〈ロンドン〉所蔵）

ジャン・ジュータ筆（1920年）

本文カラーさし絵

ドナルド・リーク

© 1968 Donald Leak

装　幀　亀倉雄策

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

息子と恋人

伊藤 整 訳

主要人物

ウォルター・モレル　教養はないが美男の炭坑夫。妻との不和から大酒飲みとなり、ついに妻子にうとまれて孤独な暮らしをする。

ガートルード・モレル　ウォルターの妻。良家の出で、教養ある女性。粗野な夫との結婚を後悔し、長男ウィリアムと次男ポールの成育へそそぐ異常な情熱のうちに生きがいを見いだそうとする。

ウィリアム・モレル　秀才の長男。ロンドンの船会社に勤めていたが、結婚を前にして丹毒のため急死する。

アニー・モレル　長女。補修学校の教師。レオナードと結婚。

ポール・モレル　次男。絵を描くことの好きな芸術家肌の青年。兄の死後、母の愛情を一身に集め、彼もまた母を熱愛する。少女ミリアムの精神的愛情にあきたらず、人妻クララと深い仲になる。

アーサー・モレル　三男。父親似で美男。粗野で衝動的な性格の青年。

ミリアム・リーヴァーズ　ロマンチックな清純な娘。ポールを深く愛しているが、その愛情があまりにも精神的であるため、ポールを失う。

クララ　バクスター・ドーズの妻。夫と別居して、ポールと同じ会社に働いているうちに、年下のポールと恋仲になる。

バクスター・ドーズ　クララの夫。金属工。妻と別居後、すさんだ生活をしているが、妻の愛人ポールと奇妙な友情を持ちあう。

第 1 部

第一章　モレル夫妻の結婚生活の初期

ボタムズ住宅は、もと、ヘル・ロー部落のあったところに建った。ヘル・ローというのは、グリーンヒル・レーンの小川の傍にあるふくらんだ藁葺きの家の集まりだった。ここに住んでいた坑夫たちは、野原を二つ越えたところにある引き上げ機を使う炭坑で働いていた。小さな炭坑なので、小川はそのために汚されることもなく、赤楊の木の下を流れていた。輪になって、ものうげにとぼとぼと引き上げ機のまわりをめぐるろばによって、これらの炭坑の石炭は地上に引き上げられた。この地方一帯に、これと同じような炭坑があった。そのうちのいくつかは、チャールズ二世の時代から掘られていて、少数の坑夫とろばが、蟻のように地面に穴を掘り、麦畑や牧場の中に奇妙な堆積と小さな黒ずんだ場所を作っていた。

これらの坑夫の小屋は、あちらこちらに、塊りになったり、並んだりして、教区の中に散らばっている小さな農家や靴下製造業者たちの家とともに、ベストウッド村をかたちづくっていた。

その後、六十年ほど前に、とつぜん変化が起こった。引き上げ機掘りの炭坑は、資本家たちの大きな炭坑のために押しやられてしまった。ノッチンガムシャーとダービーシャーに炭田と鉄鉱脈が発見され、カーストン・ウェイト会社が出現したのだ。わき立つような騒ぎの中で、バーマーストン卿は、彼の会社の最初の炭坑を、シャーウッド・フォレストのはずれにあるスピニー・パークに開いた。

この時代に、老朽化するにつれて、かんばしからぬ評判で知られていたヘル・ロー部落は焼き払われ、大量の廃棄物はきれいに片づけられた。

カーストン・ウェイト会社はうまい炭田を掘りあてたことがわかった。そこで、セルビーとナットールから小川の谷沿いに下の方へ、新しい炭坑が作られ、まもなく六つの炭坑が仕事を始めていた。ナットールから鉄道が敷設された。それは、森の中の砂岩の台地の上を走り、廃墟となったカルトゥジオ会の修道院や、ロビンフッドの泉を通り、スピニー・パークへ下り、そこから麦畑にかこまれたミントンの大きな炭坑に達した。鉄道はミントンから更に谷の斜面の農業地帯を通り抜けてバンカーズ・ヒルへ行き、ここで支線を出し、それから北へ走って、クリッチとダービーシャーの丘陵地帯を見おろすベガリーとセルビーまで延びていた。

この地方に打ち込まれた黒い鋲ともいうべき六つの炭坑は、細い鎖の輪なる鉄道によってたがいに結びつけられた。

大勢の坑夫を住まわすために、カーストン・ウェイト会社はベストウッドの丘の中腹にいくつかの広大な住宅を四角形に建てた。これがスクエアズである。その次に、ヘル・ローのあった小川のある谷間にボタムズを建てたのだ。ボタムズには六つの建物があった。それは三つずつ、二列に並んでいて、ドミノのブランク・シックスに似ていた。そして、それぞれの建物には十二の家族が住んでいた。この二列

になった住宅はベストウッドのかなり急な斜面の下にあって、少なくとも屋根裏の窓からは、セルビーのほうへゆるやかに上って行く谷の向かいの斜面を見わたすことができた。

これらの建物はどっしりと、たいへん上品に見えた。この一画をひとまわりすると、下側の建物の陰の小さな前庭には、黄色い桜草やゆきのした草が見られ、日当たりのよい上のほうの建物のまわりには、アメリカなでしこや石竹が見られる。また、小ぎれいな表窓、小さなポーチ、小さな水蠟樹の生垣、屋根裏部屋の明かり取り窓が見える。しかし、それは外側のことである。坑夫の女房たちの生活場所でない客間の辺までの光景である。彼女らの居間である台所は家の裏側にあって、隣の建物と向かい合いになっており、みすぼらしい裏庭と灰捨て穴が見えるのだった。二列の建物と灰捨て穴の長い列にはさまれて道が通っており、ここで子供たちは遊び、女たちは世間話をし、男たちはたばこをふかした。そのため、きちんと建てられ、りっぱに見えるボタムズの実際の生活状態は、その住人が台所で生活しなければならないし、また台所は灰捨て穴のある汚い道路に面しているために、かんばしからぬものだった。

モレル夫人はボタムズへ引っ越すことにあまり気乗りがしなかった。彼女がベストウッドからボタムズへ移ったころには、この住宅は建てられてからすでに十二年もたち、薄汚くなりはじめていた。しかし、それでも一ばんうまくいったほうだったのだ。その上、彼女は一ばん高い場所の建物の一ばん端に住んだ。したがって彼女の家は一方にしか隣がなく、反対側には余分な小さい庭がついていた。彼女の家は長屋の端にあったので、他の、両側に隣のある家に住む女たちにたいして、一種の貴族的感情をいだくことができた。それは、彼女の家賃は週五シリング六ペンスで、他の人々の払う五シリングより高かったからだ。しかし、この住居の優越感はモレル夫人にはあまり慰めにならなかった。

彼女は三十一歳で、結婚してから八年目だった。小柄で、ほっそりしたからだつきだが、しっかりした態度の女であった。けれども、彼女は、ボタムズの女たちと交際を始める時いくらか気おくれを感じた。越して来たのは七月だったが、九月には三人目の赤ん坊が生まれようとしていた。

彼女の夫は坑夫だった。彼らが新しくここに家庭を作り始めてまだ三週間しかたたぬころ、教会の記念祭の市の日が始まった。彼女はモレルがその日にはきっと休むだろうと思っていた。彼は祭りの、日曜の朝早く出かけて行った。ふたりの子供はすっかり興奮していた。七歳だったウィリアムは朝食が終わると、五歳の妹のアニーを残したまま、すぐ外へとび出して行き、お祭りの行なわれている場所をうろつき歩いた。妹のほうは、私も行きたいと言って午前ちゅう泣いていた。モレル夫人は自分の仕事をしていた。彼女はまだ近所の人たちをほとんど知らなかったので、この小さな娘をだれにあずければいいのかわからなかった。そのため、彼女は娘に、昼ご飯のあとでお祭りに連れていってあげると約束した。

ウィリアムは十二時半に帰って来た。彼は非常に活発な子供だった。彼は金髪で、ちょっとデンマーク人かノルウェー人に似たところがあった。

「昼ご飯できている？」と彼は帽子をかぶったままで叫んだ。「お祭りは一時半に始まるんだって」

「できたらすぐ食べさせてあげるわ」と母親は答えた。

「まだできていないの」と彼は怒って、青い目でじっと母親を見つめた。

「じゃ、ぼく、ご飯食べないで行くよ」
「そんなことしてはだめよ。五分でできるから。まだ十二時半ですよ」
「もう始まっちゃうよ」少年は泣きそうになって叫んだ。
「始まったって、あんたが死んじゃうわけでなし、おまけにまだ十二時半よ。まだ一時間はたっぷりあるわ」と母は言った。
少年は急いでテーブルの支度を手伝い、三人はすぐ食事を始めた。彼らがジャムつきのバター・プディングを食べていたとき、少年はとつぜん椅子からとび上がり、立ったままじっと動かずに耳を傾けた。まわり始めたメリーゴーラウンドの小さなきしむ音と、ラッパの音が遠くから聞こえてきた。母親に向けた彼の顔はふるえていた。
「だから言ったじゃないか」と帽子をとりに衣装戸だなのところへかけ出しながら彼は言った。
「プディングを持って行きなさい——だけどまだ一時五分よ、だからあんたの思い違いだわ——まだ二ペンスあげてなかったわね」と母親は続けざまに言った。
少年はひどくがっかりしながら、二ペンスを取りにもどって来た。そして、ものも言わずに出て行った。
「あたしも行く、あたしも行く」とアニーは言って泣きだした。
「そう、じゃあんたも連れてってあげるわ。泣き虫のおちびさん」と母親は言った。
午後になると彼女は娘の手をひいて、高い生垣の下をゆっくり歩いて丘に登って行った。野原の乾草は集められたあとで、牛が刈り取ったあとに生えた草を喰んでいた。暖かい平和な日だった
モレル夫人は祭りは好きではなかった。メリーゴーラウンドは二組あった。一組は蒸気で動くもので、一組は小馬に引かれてぐるぐる回っていた。三つの手回しオルガンが鳴っていて、不揃いなピストルの音や、やしの実売りの恐ろしい金切り声、パイプ落とし屋の叫び声、のぞきからくり屋の女の金切り声などがそれにまじって聞こえてきた。モレル夫人は、息子がライオン・ウオレスの掛け小屋の外側で、黒人をひとり殺し、ふたりの白人を不具にした有名なライオンの絵を恍惚としてながめているのを見つけた。彼女は彼をそのままにしておいて、アニーのために砂糖菓子を一本買いに行った。まもなく息子がひどく興奮して彼女のところにやって来た。
「お母さんは来るなんて言わなかったじゃない——いろんなものがあるだろう——あのライオンは三人殺したんだよ——二ペンスつかっちゃった——ほら」
彼はポケットから、もも色のこけばら模様のついたゆで卵いれのカップを二つひっぱり出した。
「ぼく、これをあそこの、おはじきを穴に入れて取る店でとったんだ。二度やって二つ取った——一回が一ペニーさ——ほらこれにはこけばら模様がついてるだろ、見てごらん、これがほしかったのさ」
息子がそれをほしがったのは、母親にカップをやりたかったからなのだと彼女は気がついた。
「まあ」と彼女は喜んで言った。「きれいだわ」
「それ持っててね。ぼく、こわすといけないから」
彼は母親が来たのに興奮しており、彼女を引っぱって、祭りをあちこち見せて歩いた。そのうちに、のぞきからくり屋のところで、彼女が並んでいる絵を一つの話にして聞かせると、彼は魅せられたように聞き入った。彼は母親から離れようとしなかった。
彼は、子供ながらも彼女を誇りに思い、片時も母親から離れなかった。小さな黒い帽子をかぶり、上着を着た彼女ほど淑女らしく見える

女はひとりもいなかった。彼女は、知っている女に会うとほほえんであいさつした。彼女は疲れたので、息子に言った。
「ねえ、もう帰る？　それともまだいる？」
「もう帰るの？」と彼は母を難ずるような顔で叫んだ。
「もう、っていっても、四時なのよ」
「もう何かご用があるの？」と彼は悲しそうだった。
「帰りたくなければ、あんたはまだいてもいいわ」と彼女は言った。そして、彼女は小さな娘を連れてゆっくりむこうへ行ってしまった。息子は、母が行ってしまうのを身を切られるように見つめながら立っていたが、それでも祭りから帰ることができなかった。彼女が月星亭の前の空地を横切ろうとしたとき、中から男たちの叫び声やビールのにおいがしてきた。彼女は自分の夫がたぶんそこにいるのだと思って少し足を早めた。
六時半ごろ、息子は疲れて、すこし青い顔をし、なんとなくみじめな様子で帰って来た。彼は、自分ではわからなかったのだが、母といっしょに帰らなかったために気分が悪くなっていたのだ。母が帰ってしまってから、祭りはすこしもおもしろくなかった。
「お父さんは帰って来た？」と彼は尋ねた。
「いいえ」と母親は答えた。
「月星亭で給仕を手伝っていたよ。窓に張ってある、穴のあいている黒いブリキの間から、腕まくりしているのが見えたもの」
「え！」と母親は短い叫び声を出した。「お金を持っていないのよ。酒手をいくらかもらえば満足するんだわ。収入のほうはどうあろうともね」
夕方薄暗くなると、モレル夫人は縫い物もできなくなり、立ち上がって戸口のほうに行った。興奮のどよめき、祭日の落ちつきなさがあたりに満ちていて、彼女もようやく祭りの気分にひたりはじめた。彼女は外へ出て横庭にはいって行った。女たちが祭りから帰って来るところだった。子供たちは足のところを青く染めた小羊や、木で作った馬を抱いていた。ときどき、飲めるだけ飲んで、ふらついた男が、よろめきながら通って行った。ときには善良な夫が、家族といっしょに平和に歩いて来た。しかし、たいていは夫がついていず、女と子供だけだった。家に残っていた母親たちは、白い前掛けの下に腕を組み、夕やみの中で立ち話をしていた。
モレル夫人はひとりぼっちだったが、それには馴れていた。息子と小さな娘は二階で眠っていた。そのために、彼女は変化のない、安定した家庭を持っているように見えた。しかし、彼女はお腹の中にいる子供のことを思ってみじめな気持ちになった。世の中というものが荒涼としたものに思われた。彼女の生活には、今とちがったことは何も起こらないのだ――少なくとも、ウィリアムが大きくなるまでは。しかし、彼女にとっては――子供たちが大きくなるまでは――このわびしい忍耐ということのほかに何もなかった。そして、子供のことを考えれば、彼女にはこの三番目の子供を育てる余裕はないのだ。彼女はこの子を生みたくなかった。父親のほうは、酒場でビールの給仕をしながら、自分も飲んだくれていた。彼女は夫を軽蔑したが、彼から離れることもできないでいた。この生まれて来る子供が彼女にとって重荷であった。ウィリアムとアニーのためでなかったら、彼女は貧乏と醜さと卑しさにこれ以上がまんできなかったろう。
彼女は外へ出ることもいやなほど重い気持ちになっていたが、家の中にいることもできず、前庭へ出て行った。暑さで窒息しそうだった。これから先の自分の人生を考えると、彼女は生き埋めになったような気持ちがした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小さな前庭は水蠟樹の生垣で、四角くかこまれていた。彼女は花の香を嗅ぎ、暮れかかる美しい夕景を見て心をしずめようと、前庭に立っていた。庭の小さな門の反対側に、燃えるように輝いている刈り取りを終えた牧場の間を、高い生垣の下を通って丘を登って行く道へ出る木戸があった。

頭上の空には夕焼けが高鳴り、脈打っているようであった。牧場からは夕映えは急速に消えてしまい、地面と生垣は夕やみの中にくすんでいた。暗くなると、丘の頂上が赤く、ぎらぎら輝いて見え、その輝きは祭りの騒ぎの名残りを伝えていた。

ときどき、生垣の下の道のくらがりを通って、男が千鳥足で家をめざして歩いて行った。若い男がひとり、丘のすその、小さな急な坂を駆け足で下ってきて、木戸に衝突した。モレル夫人は身ぶるいした。その男はまるで、木戸が彼を傷つけようとしたかのように口ぎたなく、また悲しそうに毒づきながら起き上がった。

彼女は、物事ってすっかり変わってしまうことなんてないのかしら、と思いながら家の中にはいって行った。はいってみると、自分の生活が変わってしまうことはないのがはっきりわかった。少女時代はるか昔のことに思われた。ボタムズの裏庭を重い足どりで登って行く自分と、十年前にシアネスの防波堤の上を軽々と走っていた自分が同じ人間なのだろうかと思った。

「いったい、どうしたらいいのかしら？」と彼女はひとりごとを言った。

「こういうことは、どうすればいいのかしら？　これから生まれる子供のことにしても。自分のことは考えに入れたことってないみたいだわ」

人生が我々を捉え、運び、我々の経歴を作り上げるが、しかもなおそれは真の経歴でなくて、その人間は隠蔽されたままであることがある。

「わたしは待っている」とモレル夫人はひとりごとを言った。「待っているけれど、わたしの待っているものが来ることは決してない」

そこで彼女は台所を片づけ、ランプに灯をつけ、炉の火をなおし、明日の洗濯物を見つけてそれを水に浸した。これらの仕事をしてから、彼女はすわって縫い物を始めた。彼女の針は、何時間ものあいだ布地を縫って規則正しく光っていた。ときどき、彼女は仕事の手を休めてため息をついた。また、縫い物をしている間じゅう、子供たちのためにどうすればありあわせのものを一ばんうまく利用できるだろうか、と考えていた。

十一時半に夫が帰って来た。彼のほおの黒い口ひげから上のあたりは非常に赤く、てらてら光っていた。

彼ははいって来て軽くうなずいた。彼は上きげんだった。

「おおっと、おれを待っててくれたのか、かあちゃん。アンソニーのところを手伝ってたんだ。あいつがいくらくれたと思う。しみったれた半クラウンだけさ、それっきりよ――」

「あとは、あんたがビールで飲んだことにしたんでしょう」と彼女は短く答えた。

「飲まないよ――飲まないよ。ほんとうの話だ。今日はほんのちょっとしか飲まないよ。全くなんだ」彼の声は優しくなってきた。「ほら、おまえにしょうが入りビスケットと、子供たちにやしの実を持って来たぞ」彼はしょうが入りパンと、毛だらけのやしの実をテーブルの上に置いた。「おまえはなにをやっても有難うと言ったことのない女だ」

彼女は折れて出て、やしの実を取り上げ、中に汁があるかどうか調

べるために振ってみた。
「それはいい実だぜ。間違いねえ。賭けてもいいぜ。ビル・ボジキッソンから貰ったんだ。『ビル』っておれは言ったんだ。『おまえは三つもいらないな、いらないよな。おれの息子と娘に一つくれないか？』『いいとも、ウォルター。どれでもいいのを持って行きな』って、やつは言ったんだ。それでおれは一つ貰って礼を言った。おれはあいつの目の前で振ってみるのを遠慮したらな、『いいか悪いか振ってみな』って言うんだ。それでな、それがいいってわかったんだ。あいつはいいやつさ、ビル・ボジキッソンはなあ。いいやつだよ」
「酔っぱらうとだれでも気まえよくなるのよ。それに、あんたは、あの人といっしょに酔っぱらっていたんでしょ」とモレル夫人は言った。
「なに、このくそ女、だれが酔っぱらっている。いったいだれが酔っぱらっているというんだ」とモレルは言った。
彼は月星亭（つきぼしてい）で、一日じゅう給仕を手伝ったことで上きげんだった。彼はしゃべりつづけた。
モレル夫人はひどく疲れていたし、彼のおしゃべりが苦痛だったので、彼が火をかき起こしている間に、さっさと寝に行ってしまった。
モレル夫人は、ハッチンソン大佐（ジョン・ハッチンソン、一六一五―六四チャールズ一世に反逆した宗教政治上の指導者）と共に、非国教の組合教会主義のために戦って、その後も強力な組合教会派として残った名の知られた市民の家庭に生まれた。彼女の祖父は、ノッチンガムで多くのレース製造業者が没落した頃に、レース売買に失敗して破産した。彼女の父、ジョージ・カパードは技師だった。背の高い、高慢な美男子で、自分の美しい肌と青い目を誇りにしていたが、それ以上に自己の誠実さを誇りにしていた。
ガートルードの背の低いのは母親似だった。しかし、彼女の誇り高い、不屈の精神はカパード家から受け継いだものであった。
ジョージ・カパードは自分の貧しさをひどく苦にしていた。彼はシアネスの造船所の技師の主任になった。モレル夫人――ガートルード――は彼の次女だった。彼女は母親が好きで、だれよりも母親を愛していた。しかし、彼女はカパード家の、澄んだ、挑戦的な青い目と、秀でた額を持っていた。彼女は、柔和で、ユーモラスな、心の優しい母親にたいする、父親の傲慢な態度を憎らしく思ったことを今も忘れなかった。彼女はシアネスの防波堤の上を走ったり、船を見つけたりしたことを忘れなかった。上品で誇り高い彼女は、造船所に行くと、だれからもかわいがられ、ほめられるのだった。彼女は私立学校を経営しているおもしろい老夫人のことを忘れなかった。彼女はその夫人の助手になったのだが、その私立学校の手伝いをするのが好きだった。それから、彼女はジョン・フィールドがくれた聖書を今でも持っていた。十九のころ、彼女はいつもジョン・フィールドといっしょに教会から帰って来た。ロンドンで大学教育を受けたフィールドは、裕福な商人の息子で、実業界にはいろうとしていた。
彼女は、九月のある日曜の午後のことをいつでもこまかに思い出すことが出来た。そのときふたりは彼女の家の裏のぶどうの木の下にすわっていた。日の光が、ぶどうの葉を通して彼女と彼の上にこぼれ落ちて、レースの肩掛けのような美しい模様を作っていた。ぶどうの葉にはきれいな黄色になったものも何枚かまじっていて、それは黄色い、平らな花のようだった。
「じっとすわっててくれないか」と彼は言った。「きみの髪の毛は何に似てるといったらいいのかなあ。銅か金みたいに光っている。火に焼けた銅に似た赤さだ。日の光が当たっているところは金の糸だ。なぜ皆は褐色だって言うのかなあ。きみのお母さんはねずみ色だなんて

言うね」
彼女の目は彼のきらきらする目にぶつかったが、彼女の心の中の高まりは、その清らかな顔にはほとんど現われていなかった。
「でもあなたは商売は好かないとおっしゃるのね」と彼女はきいた。
「きらいだな、大きらいだ」彼は激しく言った。
「そしてあなたは聖職につきたいとおっしゃったわね」と彼女は半ば懇願するように言った。
「そうしたいんだ。もしぼくが一流の説教師になる自信があれば、そうしたいんだ」
「じゃ、どうしてそうしないの……どうしてやってみないの？」と彼女ははげますように声を高めた。「わたしが男だったら、どんなことがあってもそうするんだけど」彼女はまっすぐに頭をあげた。彼は彼女の前ではすこしはにかみがちだった。
「だけど、ぼくのおやじはとても頑固なんだ。おやじはぼくを実業界に入れようと決心しているんだから、きっと思いどおりにしてしまうよ」
「だけどあなたが男なら」と彼女は叫んだ。
「男だということで、万事片づくわけじゃないさ」と彼は途方に暮れた頼りないしかめ面をした。
今では男というものがどんなものかもいくらか経験したし、ボタムズで、あちこち用事のために歩きまわってみたので、男だということが万能のものではないことを彼女は知っていた。
二十歳のとき、彼女の健康上の理由でシアネスを去った。彼女の父親は郷里のノッチンガムに退職してもどったのだ。ジョン・フィールドの父は没落した。ジョンは教師になって、ノーウッドへ行ってしまった。彼女は、彼の消息を、それから二年後に思いきって手紙を出して知ることができた。彼は財産のある、四十歳の、下宿の女主人と結婚していた。そして、今でも、モレル夫人はジョン・フィールドの聖書を大切にとっておいた。今では彼女は、彼が何ごとかできる人間だったとは信じていなかった。そうだ、彼女は、彼が何になれる人だったか、なれない人だったか今ではよくわかっていた。そうして、彼女は自分自身のために、彼の聖書をしまっておき、彼の思い出を完全に自分の胸の中に秘めておいた。死ぬまでの三十五年間、彼女は彼のことを口にしたことがなかった。二十三歳のとき、彼女はクリスマス・パーティで、エアウォシュ・ヴァレーから来た若者に逢った。モレルはその時二十七歳だった。彼は堂々とした体格で、姿勢の良い、きりっとした男だった。彼は光沢のある縮れた髪と、一度も剃刀を当てたことのない、りっぱな黒いあごひげを持っていた。ほおは血味がかっていた。また彼はよく笑い、しかも心から笑うので、その赤い、濡れたくちびるが人目を惹いた。彼は珍しい、豊かな、響きわたる笑い声をもっていた。ガートルード・カバードは彼に魅せられ、彼を見つめていた。彼はたいへん顔色がよく、また活気に満ちていた。彼はやすやすと滑稽なばかげたことを言ってのけた。彼は人みしりせず、だれとでも楽しくやった。彼女の父親もユーモアの豊かな男だったが、それは皮肉なユーモアだった。この男のは違っていた。それは柔らかく、知的なところのない、あたたかな一種のばかふざけだった。
彼女は彼と対照的だった。彼女は好奇心と受容性に富んだ心を持っていて、他人の話に耳を傾けるのが楽しみであり、また喜びであった。彼女は他人に話をさせるのが上手だった。彼女は考えることが好きだったので、知的だと人々に思われていた。何にもまして好きだったのは、教育のある男と、宗教や哲学や政治について話し合うことだった。その楽しみはたびたび得られるものでなかった。それで、彼女

はいつも人々に自分たちのことを話すようにさせ、そのことに自分の楽しみを求めていた。

彼女は小柄で、ほっそりしていた。額は大きく、褐色の絹のような巻き毛が束になって垂れていた。彼女の青い目は人にまっすぐに向けられ、正直で、探求的であった。彼女はカバード一族の美しい手を持っていた。彼女の着物はいつも地味だった。彼女は濃紺の絹の服を着、銀の海扇のついた銀鎖をつけていた。あとは、どっしりした、ねじれた形の金のブローチだけが彼女の装飾だった。彼女はまだ何ものにもそこなわれておらず、非常に敬虔で、美しい率直さに満ちていた。

ウォルター・モレルは彼女の前で魂を失ってしまったように見えた。この坑夫にとって、彼女は神秘と魅惑そのものの淑女だった。彼に話しかける彼女の言葉は、南部イングランドの発音であり、英語の粋であり、彼のからだをぞくぞくさせた。彼女は彼をじっと見つめた。彼は上手に踊った。それはまるで、彼のからだが、踊ることを自然な楽しいことだと思っているようだった。彼の祖父はフランスからの亡命者で、英国の酒場女と結婚したということであった——もし、それが結婚といってよいものならである。ガートルード・カバードはこの若い坑夫の踊るのを見つめた。彼の動作には魔力に似た一種の微妙な興奮があった。そして彼のからだの花ともいうべき黒い髪の乱れかかった顔は、赤味をおびていて、どんな相手と踊るときも同じように相手の頭の上で笑っていた。

ちょっとすばらしい人だ。こういう人には今まで会ったことはない、と彼女は考えた。彼女にとっては、父親が男というものの原型であった。ジョージ・カバードは態度の堂々たる、眉目秀麗な、辛らつな男だった。彼は神学書を読むのが好きだったが、心から愛読したのは使徒ポーロひとりだけだった。彼は服従を求めるときにはきびしく、うちとけているときには皮肉であった。彼はすべて、官能的な喜びは無視した。彼はこの坑夫とは非常に違っていた。

ガートルード自身、どちらかといえば踊りなどは軽蔑していた。彼女は踊りがうまくなりたいなどとは少しも望んだことはなく、ロジャー・ド・カバレー（伝統的なイギリスのふたりずつならんだ踊り）すら習ったことがなかった。

彼女は父親のように高潔な清教徒であり、また、じっさい、厳格だった。そのため、思考や精神に妨げられ、捕えられて白熱してしまう彼女の生き方とは異なり、肉体からろうそくの光のように流れ出す、この男の生命の炎のくすんだ黄金色の柔らかさは、彼女には何かすばらしいもの、彼女の及ばないもののように思われた。

彼は彼女のところにやって来てお辞儀をした。ぶどう酒を飲んだときのようなあたたかさが彼女のからだを貫いた。

「いかがです、いっしょにこの音楽で踊りませんか」と彼は優しく言った。「やさしいですよ。あなたの踊るのを見たくてしかたないんです」

彼女は、前に、自分は踊れないと彼に言ったのだ。彼女は彼のいんぎんな態度を見て微笑した。彼女のほほえみはとても美しかった。それはこの男を感動させ、すべてを忘れさせた。

「いいえ、わたしは踊りたくありません」と彼女は優しく言った。彼女の言葉は清らかに響きわたるように思われた。彼は、自分が何をしているか気づかぬまま——しばしば、彼は本能的に、的確な行動をした——彼女の傍にうやうやしく前かがみにすわった。

「ですけれど、あなたは踊らなければいけませんよ」と彼女はとがめた。

「なあに、あれは踊りたくありませんよ——あれは踊りたい曲じゃあ

りませんから」
「でも、あなたは踊ろうと誘ったじゃないですか」
彼はそれを聞くと心から笑った。
「そいつは気がつきませんでした。あんたにむかって曲がったことを言ってもだめですな」
こんどは彼女が吹き出した。
「でも、あなた、まだ完全に真直ぐになっていないようですね」と彼女は言った。
「わたしは豚の尻尾みたいなもんです。からだが曲がっているけれども、それは仕事のせいで、やむを得ないんです」と彼は騒々しいまでに笑った。
「じゃあ、あなたは坑夫なんですね！」と彼女は驚いて叫んだ。
「そうです、十のときからもぐり込んでます」
彼女は不思議そうに彼をながめた。
「十のとき！　とてもつらかったでしょう」と彼女は尋ねた。
「だれだってすぐ慣れてしまいますよ。ねずみみたいに暮らして、夜になるとひょいと穴から出て来て、外で何が起こってるかを見るってわけですよ」
「めくらになったような気がするわ」と彼女は顔をしかめた。
「もぐらみたいにね」と彼は笑った。「そうだ、もぐらみたいにぐるぐるまわるやつもいますがね」彼はにおいを嗅ぎ、行く手を見分けるように首を突き出し、めしいたもぐらが鼻で探るようなかっこうをした。
「だけどたいていのやつはそんなことをしないね」と彼は無邪気に抗議した。「あんたはやつらがどんなに深くはいって行くか見たことはないだろう。いつか、あんたを中に連れてってあげましょう。そうすればあんたは自分の目で見られるからね」
彼女ははっとして彼を見つめた。これは彼女の前にとつぜん現われた新しい人生だった。彼女は坑夫の生活を如実に悟った。何百という坑夫が地面の下で孜々として働き、夕方になると地上に上がってくるのだ。彼女には彼が高貴な人間に見えた。毎日自分の生命を危険にさらしているのに、彼は陽気だった。彼女は、純粋な謙遜の感情に、哀願の色を僅かにまぜて彼を見つめた。
「あんた、行きたくないか？」と、彼はやさしく聞いた。「たぶん、行きたくないだろう。汚れてしまうからな」彼女は今まで、「あんた」と呼ばれたことがなかった。
次のクリスマスに彼らは結婚した。そして、三月のあいだ彼女は完全に幸福だった。六か月のあいだは、とても幸福だった。
彼は禁酒の誓約に署名していた。そして絶対禁酒主義者の青いリボンをつけた。彼は派手なばかりで取りえのない男だった。ふたりは、彼女の考えでは――彼自身の家に住んでいるのだと思っていた。それは小さかったが十分便利な家で、彼女の飾りけない、誠実な気持ちにぴったり合った、どっしりした、りっぱな家具がはいっていて、全く快適だった。
近所の女たちは、どちらかといえば、彼女にたいしよそよそしく、モレルの母や妹たちは彼女の淑女らしい習慣をあざ笑った。しかし、彼女は夫が身近にいるかぎり、十分満足してひとりきりで生きることができた。愛のむつごとのようなものに飽きてくると、彼女はときどき、まじめに自分の心を打ちあけて彼に話してみた。夫はうやうやしくそれを聞いていたが、少しも理解しなかった。このことは、もっとこまやかな親密さを求める彼女の努力を無にしてしまったので、彼女ははっと恐ろしくなることがあった。ときどき夕方に、彼は落ちつき

を失っていることがあった。ただ、彼女のそばにいるだけでは彼にとって十分ではないのだと彼女は悟った。彼がちょっとした手仕事をしはじめたとき、彼女はそれを喜んだ。

彼は非常に器用な男だった。――どんなものでも作ったり、直したりできた。彼女はよくこう言ったものだ。

「わたし、あなたのお母さんの家にあるあの石炭掻きが好きだわ。――小さくてうまくできてるわ」

「おまえ、あれが好きかね？　ふうん。あれはおれが作ったんだ。だから、おまえにも一つ作ってあげるよ」

「え、ほんとう？　あれは鋼鉄よ」

「鋼鉄だってなんでもないさ。おまえにもあれそっくりのを作ってやるよ。全く同じとはいえなくてもな」

彼女は散らかるのも、がんがん響く槌の音も気にならなかった。彼は忙しく、幸福だった。

しかし、七か月目に、彼女が彼の日曜日の晴れ着にブラシをかけていたとき、胸のポケットにはいっている紙に気付いた。彼女はとつぜん好奇心をおこして、それをとり出して読んだ。彼は結婚してからそのフロックコートを着たことはほとんどなかった。また彼女も書類に好奇心をいだくというようなことは今までなかったのだ。それは未払いの家具の勘定書きだった。

「これをごらんなさい」と夜、彼がからだを洗い、食事をしたあとで、彼女は言った。「あなたの結婚式の上着のポケットから見つけたのよ。あなたはまだ勘定を払っていないんでしょう？」

「まだだよ。まだおりがなかったんだ」

「でも、みんな払ったってわたしに言ったじゃないの。わたしは土曜日にノッチンガムに行って払って来るわ。わたしはよその人の椅子に腰をかけたり、支払いの済んでないテーブルでものを食べるのはきらいだわ」

彼は返事をしなかった。

「あなたの銀行通帳をいただけない？」

「いいよ。だけどおまえにはそれは役に立たないよ」

「わたしは考えたの……」と彼女は言いはじめた。彼はまだだいぶお金が残っていると言っていた。しかし、彼女は質問をしてもむだだと悟った。彼女は苦悩と憤りのために身動きもせずすわっていた。

翌日、彼女は彼の母親に会いに行った。「あなたはウォルターに家具を買ってあげたんではないですか？」と彼女は尋ねた。

「ええ、買いましたよ」とこの年上の女は辛らつな調子で言い返した。

「それで、彼はその支払いのためにいくらあなたに渡しましたか？」

母親のほうは痛いところを突かれて、かっと怒ってしまった。

「八十ポンド、そんなに知りたいなら言いますがね」と彼女は答えた。

「八十ポンドですか！　だけどまだ四十二ポンド借りがあるんです！」

「しかたがないね」

「だけど、そのお金はみなどこへ行ってしまったんでしょう」

「もしあなたが見たいんなら、勘定書をみんなみせてあげるよ――そのほか、あの子がわたしからの借りになっていた十ポンドと、ここでやった結婚式の費用六ポンドの分もね」

「六ポンド！」とガートルード・モレルはおうむ返しに言った。彼女の父親が結婚式のためにあれだけたくさんの金を払った上に、六ポンドもの金がウォルターの両親の家で、彼の費用で飲み食いにむだ費い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com